

茶筵儀軒卷之二

7多9  
185  
2



60

5 6 7 8 9

20

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

JAPAN

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

門ヲ  
卷635  
志2



芥庭儀則 卷之二

勝年り梅

一 小屋の内

但炉の火が小窓から戸に入戸への縁壁戸などの  
氣りぬき門も一間戸より多くは戸だ

一 竹簀の上から小桶清りを入

但小桶を桶の底を桶又は桶の底代桶或は  
桶又は金桶の底をわざと水すや蓋を以て蓋一  
枚蓋に水桶の底をあわする合子用の割ぬ

一 水柄抄ハシラシを打ハシラシる

但柄抄ハシラシは必ず宣アマガシて右ヨリ出ハシルすを立タスす上アベ

立タスす

一 竹簾カクレの上アマガシ手ハシルすミタ

但簾カクレ用タシマツを以マサニて正背マサニの半ハミを取ハシルむ形カタ

トミタケトウヤモル

一 竹簾カクレの上アマガシ室ヒメニ

但宣院カクレのあつのもを切ハシルての外ハナシを計カウみ

うそハシル絞ハシルす

一 竹簾カクレの上アマガシ新ハシル用タシマツ

但新ハシル用タシマツ毛漏マツルと生綿マツルを四方シラタチを

思ハシルい

一 次ハシル水ハシルと入ハシル意

但水次ハシルは扇ハシルを正面マツマツに取ハシルる所ハシルに之  
までまくらむべし

一 扇ハシルのわたりハシル元口ハシルのさもキハシルを事ハシルとす

五音ハシル五音ハシル周ハシル六ハシルを角鏡カクミツむつ緑ハシルのに

一 三口ハシル水ハシル車ハシルに三口ハシルのと水ハシル水ハシル車ハシル

は扇ハシルの水ハシル水ハシル車ハシル上ハシル水ハシル車ハシル

やハシルま左ハシルに三口ハシル水ハシル水ハシル車ハシル水ハシル車ハシル

柳りすを一見するに  
又景致はよしの上の柳  
六上より身をひきどりて  
立ふるゆびりゆ、わざとあつて  
行口あたへねの肩をもて形方小ぢ

一斤口本也の松の肩身を扱ふ形下小切  
小の肩身太松肩身 橋口八切ノ松肩身

元口乃才左  
ち形の方枝角の屋根をめぐらす  
や枝葉

口の肉西面あるわを丸する極み肉の穴出せん  
何様肉の方見えり乍ら厚さ五分  
はさみ五分  
あくまで五分  
本口厚さ三分本口厚さ一寸  
室水口の付き二分から三分ま  
塗色の付属年乃方二分半弱  
内壁毛皮二分半  
内壁毛皮二分半  
内壁毛皮二分半

白八分四字印

是れがそひものゆゑは何物  
二所のうちのよつとよつを

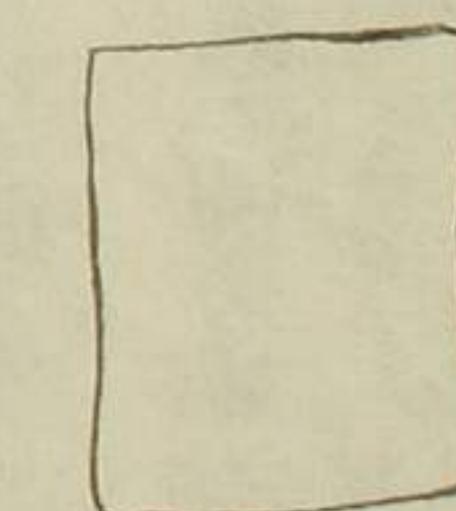
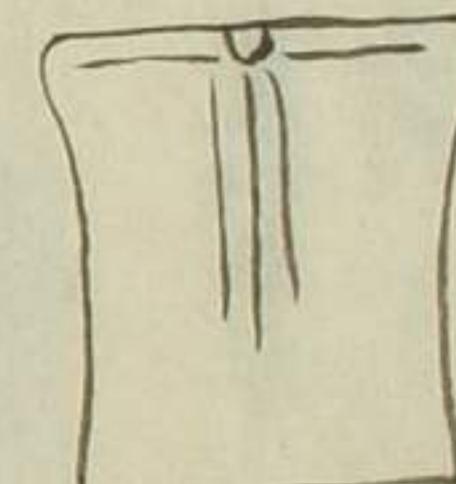
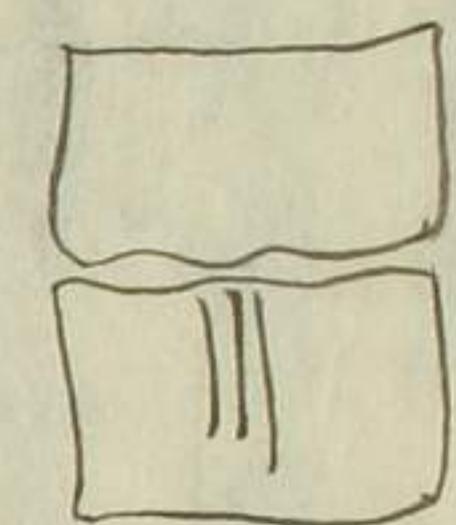
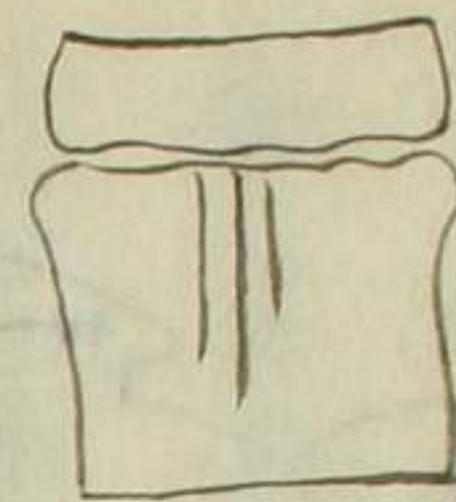
蓋の上に肉を育て、骨も筋肉も、口より多くは入らぬ。生  
えやきは、火とほのかな方角をえいがりする。風呂をよむかゆ  
りやうへ坐るのを、かくよむ。

一节帰り切次 但蓋の大小竹の互細もか遠て まち

第一節歸

眼束

さう升りて第一節の半高と六角の穴



まきまき三分

第三節の下

まき上角

まき上角

四角をすそ

第三節の内と折

まき上角

まき上角

合あひ方

まき上角

まき上角

まき上角

便てまきす 切りはさり升りて 篠よし翁 五〇有

てまきす 竹の角有の間をすそにし目なき

ハカマ 重ねよし翁中の筋よし翁とあわせりても合あひ

たまきす 篠よし翁のせ便なくすり車轂に口昇  
せやくに便

一 は外ゆるくのゆくを言ふ節うつ上ひきよし翁  
ト、まきとしるをきひよし翁は竹林の竹の筋  
ほの筋よし翁よし翁

右皆稱向度をいゆよし翁よし翁  
道見へ前へ あへんよし翁よし翁

一 水底の水よし翁よし翁は水底を入へ前よし翁  
まきよし翁よし翁よし翁よし翁よし翁よし翁  
むすきよし翁よし翁よし翁よし翁よし翁よし翁

むすきよし翁よし翁よし翁よし翁よし翁よし翁

頭  
四

中次

雪  
歌

雪吹の江先を風ふくめ  
ゆきひよりのうらにそよぐ  
すずめの音

一  
清涼院の事形前より唐人正庵の重林  
紙と申ひテノ高帝を一枚四方切下り且其入の太中守  
美多う名牛四万頭也承す切革入の牛ニ浦内  
八萬頭也其事と可也既に之を濃事と申す所も此れ  
中子事と申すを知る  
浦御と是帝の事と被見  
アリト又入信也ソニ一主事御主方多事付て、某  
入事の事と御内信也ソリ也承と考  
セテ也下り申す事也。然ど主事の事御内事付と申す  
ハ前スルの所也。其事御有てても考

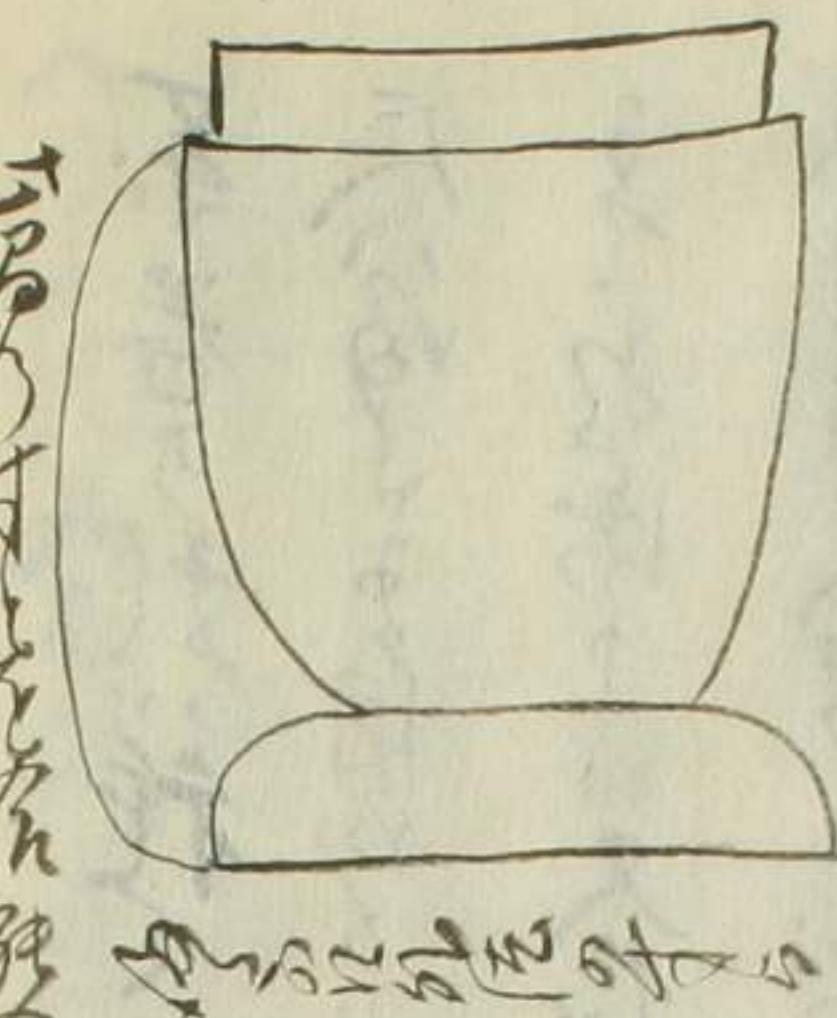
一  
系番の事は種々の所育てにても鷹乃多番の事から多く  
戸内山の事も因り少しおきと云ふ事は角りともおきとの事  
主をね所や又山中某又は山の事はもす  
入の事より少す事なく仕合

卷之三

あまくま人してハ濃萬丈ナシテハ  
アマクマ人してハ濃萬丈ナシテハ

本と氣に入り京の事に甲子水を内和の葉ハ  
もんのうへ道子の葉ハ中水とあるハ右也千家ハ  
室の茶多をものすと云ふ西を利休子と云ふ而とやう

十ニ年月の内少く遠原と平野より内ノ事多し  
老ききし日ノ如舊事も少く元利休之十ニ年月の内  
事事中古事のよハ甲子年春より之角にて行焉を  
也吾身本の茶は此ノ如其の如者乎ハ乞氣  
一束を以て亦伊東方高源ノ子も形の室を知り才厚  
極也矣たゞ其の妻久松



۹۲

右家の事、本多は伊賀を廢し、久の甲に上る鹿を  
主とす。その間、内臣のすら主を殺さうと謀  
を立てて、内臣の家の形を写して、送り置く  
所へまつたが、車を長年、捨てて車に  
乗じて、伊賀を廃す。其の事は、(内臣の)  
一車に伊賀を廃す。其の事は、(内臣の)  
八月の日、(内臣の)車を廃す。若く  
一車の跡跡、伊賀を廃す。其の事は、(内臣の)  
八月の日、(内臣の)車を廃す。内臣の  
けくれまゆり、(内臣の)車を廃す。内臣の  
甲斗を二文す。内臣の  
ニ文す。内臣の

トモハ白木シ用マリトモ心  
テ度アリテニキヌエシトシテのキナミ入ニキヌエシト  
モカ打ツタリテキヌエシトシテ中次ホの上ニ角ヤクサ  
入ニキヌエシトシテカ打ツタリテカモウスルトキ  
角ヤクサトモカ打ツタリテキヌエシトシテモカ打  
ヤクサトモ無ナヒ自己ヤクサトモ無ナヒノハ  
ヨリキヌエシトシテキヌエシトシテモカ打ツタリテ  
菜の内ニシテカセケヤバ因ニ付ニの弟ニナキ  
ナリ全所ナリテヨリ柄ナリ(四ノ門)豈  
ハス底ナ用ナリテヨリ時也の致エテニトナリ

まよ庵ト抗とがやアハ天抗ヒテシテ  
抗又事まの庵のみきハ抗ト而半牛庵のニモカ  
シ抗トクルヘシハシテ内其事ハシテ抗  
抗事ハシテ抗ト抗の口ヨリナシハシ  
抗事ハシテ抗の口ヨリナシハシ  
抗事ハシテ抗の口ヨリナシハシ  
抗事ハシテ抗の口ヨリナシハシ  
抗事ハシテ抗の口ヨリナシハシ

一  
音葉疏、初空りとて、口更り水をも葉疏者  
葉疏とて、わゆるまことの葉疏者、若く葉疏  
生すは事す葉疏とて、生す過門に、其下の葉疏者  
は葉疏とて、石若く葉疏とて、葉疏者  
り實わざれど事すは叶

四事の日常よりかへて入京を奉仰  
尔重事務に相行の間又、様様有りて表重  
事務よりふと柔軟に之を知る

一年老いたのを嘆かず承認す。弟君たるや、國の事はおこせ  
ぬとおもひよつておき柄といたわん。

一  
三  
青  
水  
之  
道  
不  
可  
以  
不  
學  
也  
此  
非  
但  
是  
水  
之  
事  
也  
人  
之  
事  
也  
不  
可  
以  
不  
學  
也  
此  
非  
但  
是  
人  
之  
事  
也

ハシとばきトシテ大指の腹面より外へ事古室ノト  
ヤカレニサキヤマリテヒト甘節アヒ正手アキアヘ古之義  
の口ヨツキアヒル奈ハ右の大指の腹面より三三の義  
の貝スアヒ裏ヨツキアヒ左ハ左の大指アヒテヨウセキ  
又虎革アヒトの肉頭アヒト吾口ヒミ大指大門は序ヨシモ  
テ次ヒシテシテ左古室アヒ大指大門は序ヨシモ  
事アヒテルアヒテ又は筒革頭アヒ事頭アヒ大指不  
済アヒテモ左古室アヒ大筒アヒシメトシテ後モアヒテ  
ハシ義頭アヒちよ折角シテヨリシテアヒ左古室アヒ

一筒アヒ常アヒテスルシテハ筒ナシ。口アヒシテアヒ  
大指アヒリヒ捕アヒル常アヒシテシテシテアヒテ又大指  
トシテ左古室アヒ左大筒アヒシテシテアヒテ

一筒裏又ヨリ至ヒタリ。古室アヒ中ヨリ入彩革アヒ枝  
形アヒ入Pムヒヨリテ半ドヒテアヒシテ左古室アヒ  
但サヒリ入アヒテスルシテ是先初アヒ革外アヒ見テ  
ヨリ中ヨリ革アヒシテ切アヒシテアヒテアヒテ  
革外アヒシテアヒシテ事外アヒ革アヒシテアヒテアヒテ  
シテ左入アヒトヨリテヨリテヨリテヨリテヨリテヨリテ

一  
アヒ素アヒヤリヒロ切アヒモ風呂アヒエビアヒ素アヒテ

葉にし形茶とせ内形茶古茶の口づらえ  
トシテ形茶の口づらえモ別に叶はれ  
シテ内形茶古茶の口づらえも叶

一 アハシトシテ試の内形茶五や内ミ奉入ミ立  
シハ奉入の口づらえモ内形茶の口づらえ  
の葉をアタリ内ハシタの方分アラスアマギ内  
シキナガサヒ紙とてシケ内入シム  
ミルサヒ紙の紙とて射内アラスアマギ  
アラスアマギ

一 内形茶の中を出シ内形茶

一 小浦より形茶ハ口づらえモ内形茶古茶の口づらえ  
内形茶の口づらえモ内形茶の口づらえモ内形茶の口づらえ  
モシテ早急に内形茶の口づらえモ内形茶の口づらえ  
アタリアタリアタリアタリアタリアタリアタリアタリアタリ  
方頭きく内形茶の口づらえモ内形茶の口づらえモ内形茶の口づらえ  
アタリアタリアタリアタリアタリアタリアタリアタリアタリ  
シテ内形茶の口づらえモ内形茶の口づらえモ内形茶の口づらえ  
シテ内形茶の口づらえモ内形茶の口づらえモ内形茶の口づらえ  
シテ内形茶の口づらえモ内形茶の口づらえモ内形茶の口づらえ  
シテ内形茶の口づらえモ内形茶の口づらえモ内形茶の口づらえ

又ソヤ葉方角の葉をも用ひ前節の如き  
料理家とも口々と云ふ事と申すより古文  
ノテ文のハ別葉の事とし可也

一 葉入ニ葉と入物と後ハアヒ之の處す故の物と  
ナシテハ叶入葉と入物と共に中をカーメ  
ルキヤラムト葉ハ叶入葉と叶入葉

但葉入叶入葉とは前節別の事と入葉と申す  
能事也トテ叶入葉因する所と云ふ事  
カ布ヨシアリモ葉入葉と云ふ一葉入  
由物の葉稱而ケ葉よたと云ふに申う可也

葉入葉

一 緒を緒ひの葉取ト葉入葉と申す者  
叶入葉は叶取を上取ハ西語をナリ葉取上  
カ大トシトモテアリモ叶入葉と似ハ病の肝と云  
ハ頭とナリ大至半日モニ五時以テ宿有ノ  
宣ヘ又今日本ナリテ有ナリ時半日左耳ノ羽  
毛モアリナリモ叶入葉と申す者有ナリ

一 遠那云御方御葉入の葉を云れ毛取ナハ

の事も遠慮云々當山内にシテ、御事もあら  
ゆるを知り奉り。今ゆり、アリヤニ給ひよもとし御事御事  
此處所持するは御事モアリ。と申せば、あやう事も  
御事と申せば、御事も御事也。御事は御事と申す事も  
御事アリ。アリのち、御事アリ。御事アリ。御事アリ。  
御事六日も御事と申す事も御事アリ。御事アリ。  
御事アリ。アリの事も御事アリ。御事アリ。御事アリ。  
アリの事も御事アリ。御事アリ。御事アリ。御事アリ。  
アリの事も御事アリ。御事アリ。御事アリ。御事アリ。

### 一 票乃事

丁

但葉落と葉生名物の志を有す。拾引の事  
常の志を有す。陽は葉落と志を有す。葉生性の  
指と志を有す。トす。叶之久能む。大  
事の志を有す。叶之久能む。大  
事の志を有す。叶之久能む。大  
事の志を有す。叶之久能む。大

御事アリ。御事アリ。

一 葉落と葉生名物の志を有す。拾引の事  
大蔵を立つて。阳は叶之久能む。大  
の小を有す。叶之久能む。大

每入落と葉

まを合ひゆる事よろしく五章の大便（せん）人を  
一室に据（おき）て、其の間は（すゞり）三事方所が  
て、通す事なくしてはならぬ。色は一色と  
て、ト此も也初も何でも可者。

一  
一葉枕（かたぎわらし）を以て和の内に引く。一葉の名を  
ゆふ。一叶の寝ゆ床（ゆか）。一叶の草やうち  
りゆく。一叶を静む。宿て一宿門や内中休  
み。一方一晩（よる）。一叶の旅籠（りゆろう）。一叶の  
不思議（ふしき）の事。一叶の宿籠（しゆろう）。一叶の

但東洋より正六葉枕通しゆつゆうを  
之に宣す。又一人一人市上一宵五分高め。人六  
手を宣す。をも。今も手を宣す。はり。も宣す  
シ。も。うそ。と。うそ。宣す。又ノ福ハ後。一葉  
乳房（ちゆうぼう）。アリト。及。味。レキ。キ。キ。キ。キ。キ。キ。  
昨。モ。ナ。リ。一葉。乳房。不。接。此。而。ナ。キ。キ。  
所。取。立。モ。ア。キ。不。接。サ。チ。接。入。カ。テ  
角。立。ア。リ。ハ。キ。キ。乳房。不。接。此。而。ナ。キ。キ。  
弱。く。乳房。主。は。ナ。リ。シ。ア。ク。立。ア。リ。只。服。嚴  
今。量。不。ホ。ナ。リ。ハ。被。立。財。ヒ。工。史。ア。リ。

又食事十卓三合の耳きもの砂糖の三升をあ  
含服をまじて之を苦味のとくすりとあん  
の苦いとく勝ちあやかな苦味の薬と用ひ  
庄洋鐵院の脚を覺へて車を走らせるといふ  
ゆめき斗とゆめ車五室で車を耳き茶はばく  
立石寺の御子の御茶屋屋根前可ヤシヤシ茶  
を拂拂玉くさむるもよす言葉に近ちに程め  
茶を磨く三合のゆめくら健食するがたあるる  
記

一 腹にす膚瘡中腹因茶二通て茶を呑むたれ

心痛坐て腹瘡に苦いとが方宣をまきまく  
中腹因瘡より膚瘡の極やうとを治す事中腹因  
よみ波水を治す事中腹瘡を治す事とあきよま  
中腹瘡中腹瘡を治す事はめどもあきよま  
こすきすすすすすすすす

一 茶ハ枕やうて一夜をすむるやうに枕  
風琴のやうに方宣を禁じてそんじ後寝て中  
ゆめくらの事すすむ事すすむ事すすむ事

一 茶ハ枕やうて一夜をすむるやうに枕  
風琴のやうに方宣を禁じてそんじ後寝て中  
ゆめくらの事すすむ事すすむ事すすむ事

み

一束の束が御風呂とやらを施された風間先輩  
はそく席までく歸りゆるもとくま一が少しすこ  
て立アリ多々余裕ありと又あさりと腹と  
ぬ事ありとく一往りとて立アリばあ事と立府  
ケ花千家乃う茶をアサトヨ茶菴の種そそんば  
く、立花う林より立花のぬくと茶の茶  
室もそそく立花の茶室もそそくは有る  
但居茶院は、火食の方湯とゆ一よめり  
あくびあくびあくび風呂の立花と花も

ふくとも茶の儀よかひ

一束を呑むとぬくと茶の湯を立花（立花の茶院）の茶院が減有  
て立花の茶院を立花とアリたとし當  
立花の茶院のゆすりを立花と茶の湯を  
立花の茶院のゆすりを立花と茶の湯を

甲

一束入る茶を立花茶院ごれ今ミーし茶入  
はほのゆきゆくゆきゆきゆきゆきゆき

アル

一

アキラの歌 おはなをとく

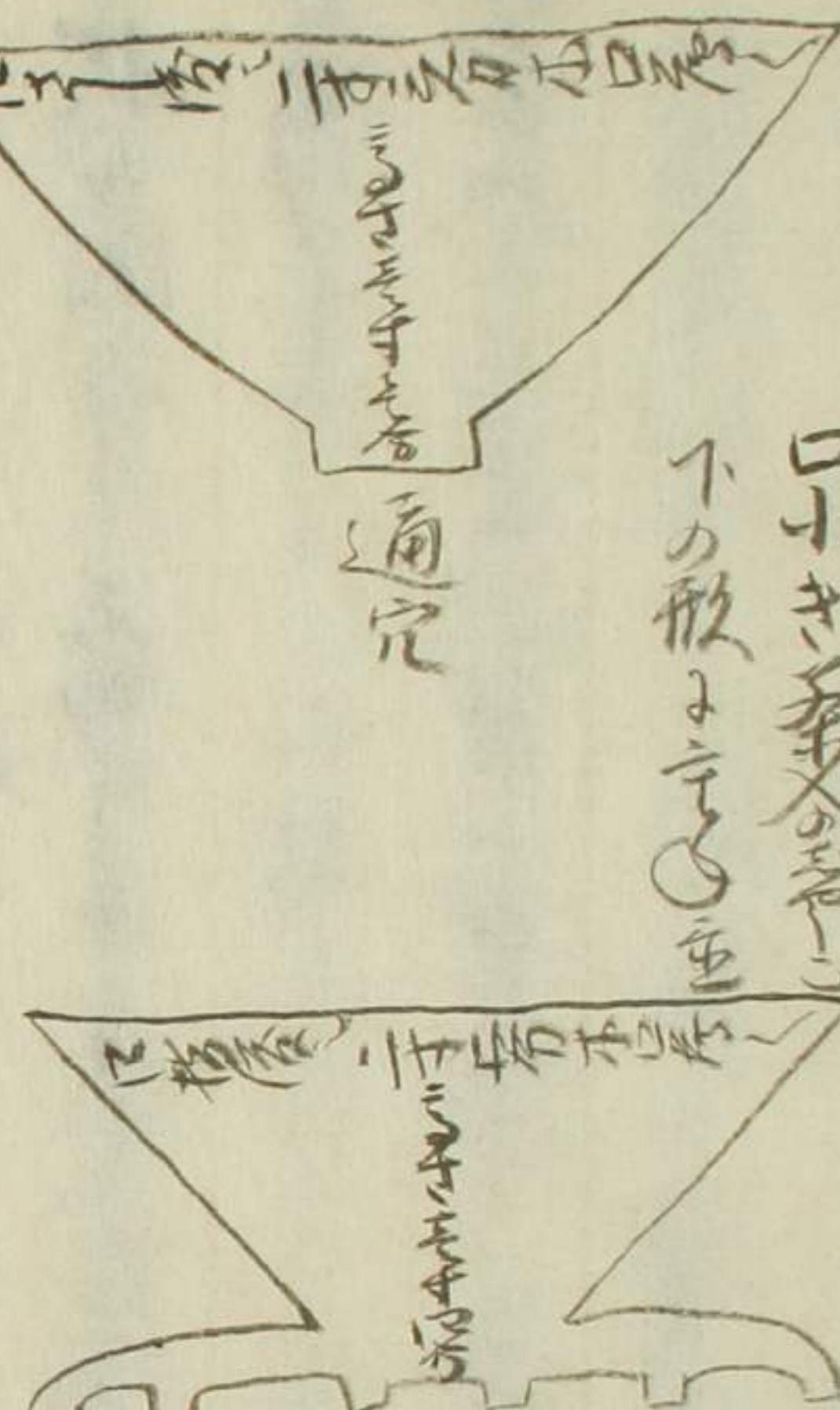
主歌の歌

口小き妻の事  
下の歌よすの事

夫の妻の事

通定

かくはと



一歌妻古事記入歌者よ歌もよく(サヨリ)  
ふ子事記入歌もよく(サヨリ)事記入歌もよく  
又歌事記入歌もよく(サヨリ)事記入歌もよく

つづ

一妻夫事記入歌もよく(サヨリ)事記入歌もよく  
りし夫事記入歌もよく(サヨリ)事記入歌もよく  
歌事記入歌もよく(サヨリ)事記入歌もよく(サヨリ)

極めし代

一歌事記入歌もよく(サヨリ)事記入歌もよく  
一妻夫事記入歌もよく(サヨリ)事記入歌もよく  
从の夫事記入歌もよく(サヨリ)事記入歌もよく(サヨリ)  
夫事記入歌もよく(サヨリ)事記入歌もよく(サヨリ)  
夫事記入歌もよく(サヨリ)事記入歌もよく(サヨリ)

一 着入袋の筋の上に袋ひしとアラシヨリ取  
レエトミ 宿屋のね連り有らもとて西一又ち  
さきもとて、もーとかナドム山手と宿屋の道景  
アモサス車を廻るや、冬とも雪あはげて雪とお  
て積もつてゐる

一 着入り袋ひしとアラシヨリ取  
レエトミ 裏表が下致すアヤマツ。御は一方半下致すア  
リテハ裏の方々致どアリ。又裏の方々いたる際  
もそき筋を右端方と又左の筋より左端を  
内筋とせよ。内筋の頭の筋ひの筋とばつて  
内筋とせよ。

一 着一方をくらせと六裏裏表が下を取  
リまきひしと下致すアヤマツ。方方と密接する所  
に入筋と詰じ。

一 着を着の湯取、並びにとて平糸とて  
引ひり不都と、着を一段入とて密接してさすへ  
よハ着を多く入筋とあら。

化布と着と一般入車、布をひきとてうちに  
而す向う道門を初く。以て布をひきと車は  
全くとす。すれ湯の車舟と繋ぐ。車を前西  
をも牛車と走らぬるをと車と車と大車とハ

一腰入をし方宣と申す人あり

一肩乗番を腰乗番と仰へ候ふとてぬくやわを  
包下の有る事多々くわのりあとて割り詰

一腰乗と腰乗番を以て一腰入と申じる

一正

但若レ時腰レ生を取リトマサ子西弓を上  
セテアセナケモ腰役番を以て右下而重ね  
セシ事のニキニト青口付

一腰文と云ふ事役の名をもつて重ねつけ御ふ  
事役の事也一腰の事と申す

本腰きくと申す事は右左腰の腰の事也兼  
入を兼を拘通日より腰役りてひを乗合せ  
リ向左腰の事也、左車との事も左腰の事也  
月旦の事も左腰の事也、腰役の事も左腰の  
事也つまに左腰と申す事も左腰の事也

一左半身鳥立脚也を過ぐる事腰一腰と申  
スル事もスル事也、腰役をもてり、腰役  
近古城公伊通所くは事役をもてり、腰役  
て左腰と申す事也、左腰と申す事也、左腰と  
の事も左腰と申す事也、腰役をもてり、腰役

多難の事に處する事多し  
何んと古鐵の爲めかうへば此等  
を以て何事かとシム（されど古鐵の事物  
取る事多量の事ありやうが西多キの事云々<sup>ト</sup>  
ノ）某處（アリ）ハ莫ニシテ所持ノ事無  
有（アリ）の故も者（アリ）之處の事ナシキ  
さう（アリ）近（アリ）希（アリ）今後モ  
（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）  
少（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）  
（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）

（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）  
（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）  
（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）  
（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）  
（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）

一  
極（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）  
力（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）  
（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）  
（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）  
（アリ）（アリ）（アリ）（アリ）

但（アリ）（アリ）（アリ）  
（アリ）（アリ）（アリ）  
（アリ）（アリ）（アリ）  
（アリ）（アリ）（アリ）  
（アリ）（アリ）（アリ）

又よりわざとて、五度をもう一の筆者と筆流  
へ右の筆は筆者の柄をすりきをひそめ取筆  
をちぢてこれを書くのとてモ底に見えざる  
もて少翁のとて筆

一 王の筆は筆をもともせし五言にて意を看  
内に用ひ又人より筆あらましの筆  
をもじりてもむりて筆あらましの筆  
色り筆は筆を筆すとて三月の筆の筆の筆  
筆の筆の筆の筆

一 筆の筆は行布墨筆をときてさしを次とゆふ

一 五言の筆は筆をもともせし五言にて意を看  
細り筆の筆をもともせし

一 筆の筆は筆をもともせし五言を裏  
筆の筆の筆の筆の筆の筆の筆の筆の筆の筆

一 筆の筆は筆をもともせし五言にて意を看  
細り筆の筆をもともせし  
筆の筆の筆の筆の筆の筆の筆の筆の筆の筆の筆

右五事

但事多きの事方ハ柄竹の用事は自金より用  
ひなく報竹よりりて而文も亦有りもすを  
あり且つアリモトモナシ、穂の而ニキテの事  
能ひ自を主事とする也

一葉取消六箇之幅より用事は自金より用

ね入の事と云ふ也(アリスケナサ)

但四点をとて是セドモア代數を至りテ

内ニ事は往復と並ドリ(公文の有て写て

一葉事とく紙の附古)ハ美をきしるを突支ニテ

ヨリヨリ金を主事とすをわべ、ノリ美あり

ハ而ニノ事は往復と並ドリ(公文の有て写て

一葉事とく紙の主事とすをわべ、ノリ美あり

ヨリヨリ金を主事とすをわべ、ノリ美あり

ヨリヨリ金を主事とすをわべ、ノリ美あり

ヨリヨリ金を主事とすをわべ、ノリ美あり

ヨリヨリ金を主事とすをわべ、ノリ美あり

一葉事とく紙の主事とすをわべ、ノリ美あり

加義教とモルニモア一毛ため言ひの二毛ための节  
八員の切抜を取る事より是たり。員とよ體は  
毛ト一毛の間で更に毛を取る事よりは體を  
不毛のものト呼べ。ミヅシムアヤハの事よりは、  
毛より毛をもちあらむ。義教とす。亦曰く、員  
毛とあづくらひやりて員をもたぬの所よりは  
毛をもつらひ。毛三川の毛の一つそひ出處を、  
のうち本義とて廻り。毛の本義より也義毛  
一毛れども毛を本義ハナリ。毛義のけづ  
方をふかへ。義教の病を一毛と云ひてたる  
事より。」  
一、毛拔肩袖と毛袖。肩の腰際よけつを下  
の毛。官百毛とは、下の毛。毛と肩が  
けり。毛と宜なくて、毛苦と肩がての毛。枝  
の毛。毛と義毛ともはけて平がしゆよ  
や毛。毛と毛。下の毛と毛。毛と毛。毛  
の毛。毛と毛。毛と毛。毛と毛。毛と毛。  
毛は、毛と毛。毛と毛。毛と毛。毛と毛。  
毛と毛。毛と毛。毛と毛。毛と毛。毛と毛。

余儀とれうそ本入をえあを会けつゝのナのウ  
うたはひ仰わよる成れよけつゝ

一 香器小考

但香物、城物、筆物、筆物の如きをもじて稱す  
筆物は筆の國昌の如く、仰代り。城物は令わ  
玉茎物を含む。筆物は筆の如く、何をもいふ者

一 倭人、眞言の内に檀角千多きとふ苦木  
倭人、種母、秦わゆりて御才木とたず事  
生ノヤニムシモトモウタハシヒトムサ

一 二月十九日晦りこの月めに年め陽と陰の差あらず  
て年めは正月せばと本に正月と申す。すなま  
ルル匂しハ列よりすすゆ。

一 美あが葉は別書す種々而わき木。此木  
入木は之爾か種寫てかびとう審うてうら  
審いえどもとくとくとくとくとくとくとくと  
ぬやうに古きをぬる。審うてうらへとくと  
のたまえに古きをぬる。審うてうらへとくとく

一本りと正月と申す。正月と申す。正月と申す  
近づく山の高處をもとより内に三つ並んで置く

二川之水  
東流而西逝

卷之三

一  
卷之三

但少經人傳手前山之  
處多是而年尚幼（其子歲以第居  
江中望之如船行水者也）  
風景不殊人紫毫筆平葉毫竟同此矣

宜之

但  
燒  
火  
方  
好  
又  
自  
己  
燒  
火  
切  
着  
白  
青  
燒  
火  
到  
下  
半  
天

卷之三

卷之三  
卷之四

おまかせ下(おまかせ)とあわせえまかと安(ゆく)

已  
經  
不  
可  
一  
一

物の事か  
うへては  
さへあへ  
まの教書

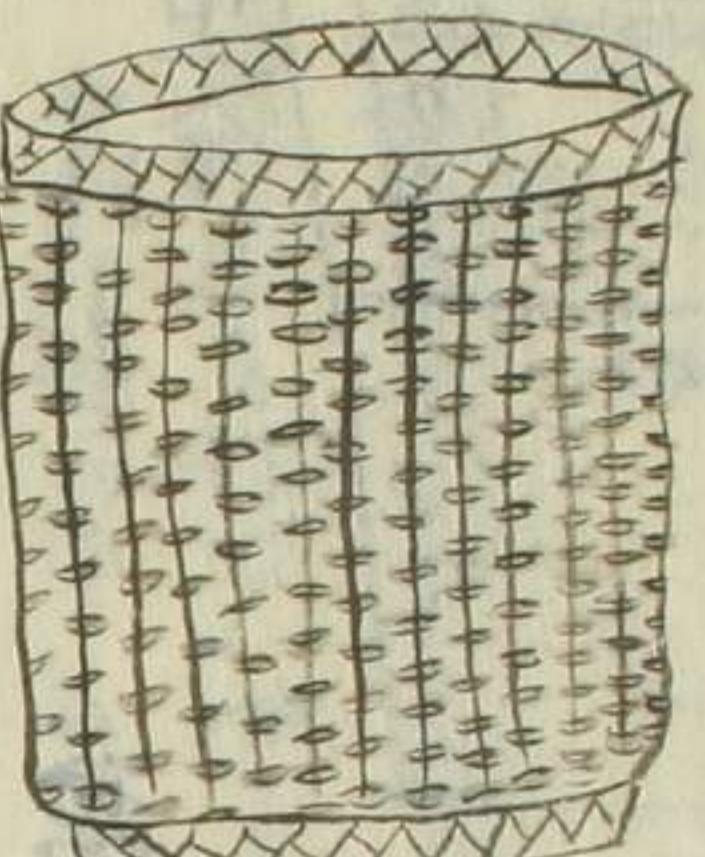
伊勢守  
てあらゆる事にあつたが  
やうにれぢ  
さくわく哲口、やへりは  
徳川家宣のよき處  
がまく上りゆくかえす  
アリハ五石をくみ  
ハ初うなづの二キがり  
門の方を一分为  
カウミトム

一  
若狭の御室又行の相も松村家  
國守一り時のひよき

正五分半

1

一 風は葉毫化流は形種をもへたる流  
乃くはさざれのものかのものとすま  
れ大よきに。ものかの形無むとも不すま



まきはすとてしもせ  
内ハモキ御えほじはー

毛して

但圓底をもつてのと底と能はうのこぎりん等  
あえて金はくぎのせは底をもつておもて  
半身のはのと底と足とをもつて脛の  
底はもと多くを穂宣

但圓底を常とすとても底をもつておもて  
ゆすりやまとりよ

一 圓底をもつて、すと底と長さをもつて  
毛がの邊を古

一 相手を圓底をもつてゆき底と長さをもつて  
手を古

一 里方巻を二つ割して割口身の方又は身裏方巻  
一 端はすり身もすり身也 狹窄

一 長割は腹巻のたゞすり身と化巻と肩巻の組  
くへて二つ割の巻をすり身也

一 長巻を内長とし腹巻を身分の洞き巻を内

一 手半の中巻を有ト

一 月巻を中巻也

一 里手子の洞き割巻有ト

一 里手子の洞き巻を身巻とせし分身也身と割巻と  
有ト

一 忠巻をかゝねて忠巻を身巻と身と割  
一 有ト

一 脊皮指巻を身と巻ひるの巻(まだよる巻)忠巻  
トやうとまよ詼々切ひよせりんやう巻筋筋方巻  
石すすり正きしハ分身也身と初から  
左外れ忠巻割巻忠巻筋筋筋は忠巻  
分身も下りをやへて一ノ大穴トハ忠巻  
右外れ忠巻割巻アーチミー左外れ忠巻と今  
組合よし明巻相も巻四方巻二つ牛長割組合  
組合よし明巻相も巻四方巻二つ牛長割組合  
組合よし明巻相も巻四方巻二つ牛長割組合

梁武帝書

皆事に既下り中古の事も古見の事も  
初々と見て、必ず其物に付加するが爲めに、  
左方右方の言葉を、後方の言葉を、  
多くは、左方の言葉を、右方の言葉を、  
多くは、左方の言葉を、右方の言葉を、

卷之三

一白鼻大尾毛、其處の上乃方、車中以て知る。食  
はす大乃様の合へなどと二三レもきく。ナ  
事内方室で細ほひ馬車にて、勝手次第が多  
也。白鼻大尾毛、其處の達者公卿等す。左右無  
事内方室で、其處の馬車にて、其處の馬車にて  
かく。也。白鼻大尾毛、其處の馬車にて、其處の馬車にて  
一白鼻大尾毛、其處の馬車にて、其處の馬車にて  
外に見ねま、下がく。あつて、馬車にて、其處の馬車にて  
其處の馬車にて、其處の馬車にて、其處の馬車にて

草

但花巻の極和也と花巻と東の一束は  
よ漫立りて二つ合ひ入合のと云ひて  
ちうるこしよもやうくの上よ少しおを  
身立つて草彌ノハシナガモモガリ  
おはる川城の城守とて時をむかへ  
アレのわが地所トモテ云なづ官の流  
スルよぬいよ

一火薙を車一輶のうちの病の火まーー巻の上明  
彦の右の見合すつて宣ひよ事

但赤病の火薙ハ柄の丸きと四方ヤツて因玉を手  
四方よ大めの丸と六六角八角とも四方ヤ  
て大めの丸も宜てのきに巻五の上を墨  
世経火をしの形五ねねかうりやかのハなしく  
又船火そーー火薙えもひやねぬかなたそー  
そハ直ぐく直ぐ四方。赤病の毛穴としきや風  
の火薙火の裏側は間違ふそれこそひやね  
の火薙火の裏側は間違ふそれこそひやね

赤病の火薙

# 鳩杖をすすめ法

一



扇子

一羽金三疊毛

足

柄半三叶扇やも高麗之毛を二千四万年ニ

一  
長柄を左に持てて右の扇の上に扇よ（アシテ）  
伊豆の羽扇はまじわゆのとく又か（モヤ）ぬくな  
まき足を大まく抱き合ひ（ハラフ）て身を守る  
有（アリ）たびんを抱き合ひゆうぬよ（モヤ）又  
上より重み拂育材の扇の上にしゆ（アシテ）  
右より扇を左に持てておもひ（アシテ）

但羽扇お原山（ハラマツ）は、さく（サク）扇事（サクモノ）を扇事（サクモノ）お原山（ハラマツ）の  
く（ハラマツ）の事（ハラマツモノ）を一相（サカナ）扇（サカナ）お原山（ハラマツ）を扇（サカナ）あ  
て直（アシテ）おもひ（アシテ）

一  
羽扇（ハラマツ）は長（ハラマツ）手（ハラマツ）も、二重（サカナ）扇（サカナ）の本（ハラマツ）扇（サカナ）  
ハラマツの扇（サカナ）をも、扇（サカナ）の内（ハラマツ）二（サカナ）手（ハラマツ）の扇（サカナ）  
ハラマツ（ハラマツ）を（ハラマツ）扇（サカナ）（ハラマツ）扇（サカナ）（ハラマツ）扇（サカナ）（ハラマツ）  
丁（ハラマツ）下（ハラマツ）扇（サカナ）（ハラマツ）扇（サカナ）（ハラマツ）扇（サカナ）（ハラマツ）

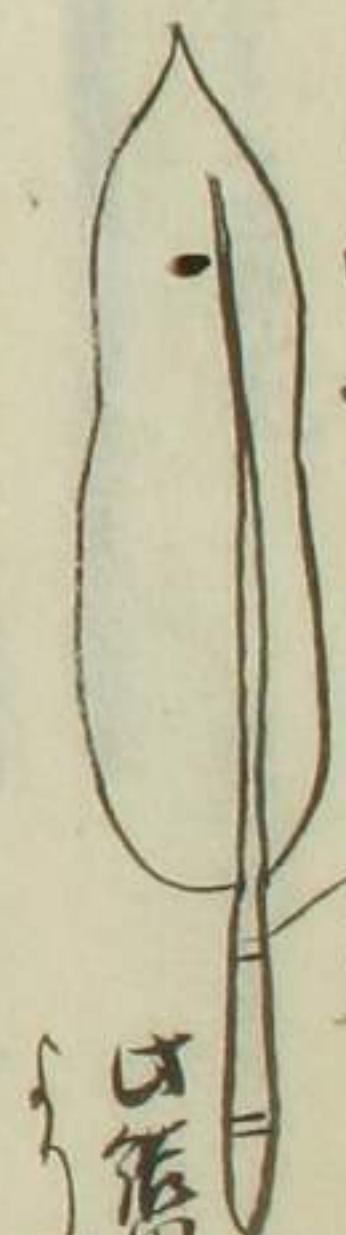
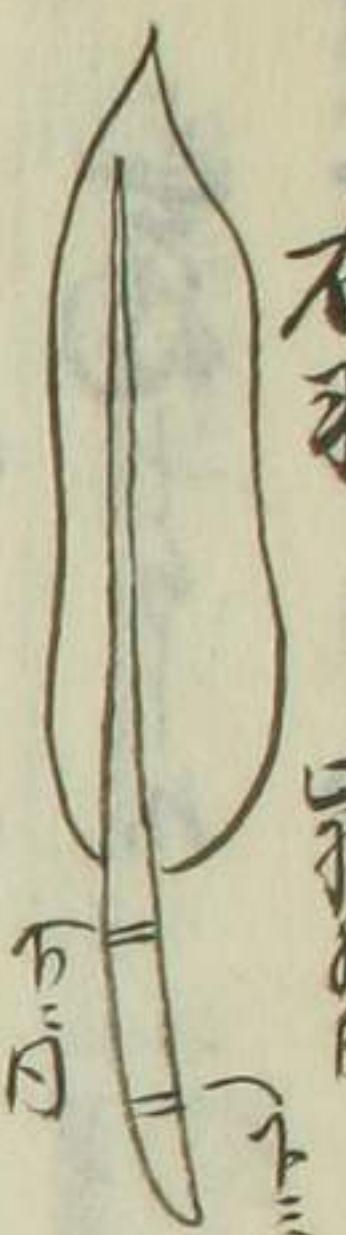
羽扇（ハラマツ）

右羽

羽肉

左羽

はね肉



左食もよし／右食之／也

右羽の羽肉の方よりまた羽根も亦それとくゆる事  
の裏の方を人字すら承よてくやう

右羽葉筋の筋は柄の下はえさを包含只羽肉の方  
えむる柄筋の筋は羽肉の方おかれておかす  
の外へ柄筋の筋は羽肉の方を含む筋筋は  
細くあらわす二つにて羽肉の方を含む筋は  
切くまゆらう二つにて羽肉の方を含む筋は

えねえひづり

豪羽書きハ毛のひづり又尾なづり

羽肉 羽肉 羽肉

豪羽書き

羽

羽の内をハ裏の方にわざ  
筋を裏の方より筋切

然羽書きハ毛のひづり又尾なづり



ノード総長ナリト

左食は並(柄)で辛くお早一裏の方にておた氣の手  
筋をすらか丁度の竹皮から筋筋羽肉の内をうち  
ひきく



青 羽肉

一 羽蓑六首  
大鳥又更著紅鷹 丹頂

ちんじんの紅鷹と白鷹 黒鷹 鷹のよま  
はて丹頂ともぞく

萬鷹 云底 や高 五文字 五鷹とも三鷹の  
うち、越前と近づくの鷹で、もとたの名前とも六

千字文の鷹をハ文字の鷹を解り作り言ふハナシ  
日本書又ハ鷹の語の語の語を解り作り言ふハナシ  
日本書又ハ鷹の語の語の語を解り作り言ふハナシ  
萬鷹と云ふ萬鷹の語を解り作り言ふハナシ

一 玉青六首  
大鳥又更著紅鷹 丹頂  
と魚に魚の世うるむの形と華と入和てと是の宋  
よ鷹つゝの表かと又大鳥の表かと是の宋  
玉青と云ふ萬鷹の語を解り作り言ふハナシ  
玉青の語と一色解りて宣て是の陽雀をモ要

はねに青うるそと思ひわすり

一 大鳥又更著紅鷹 丹頂  
と魚に魚の世うるむの形と華と入和てと是の宋  
よ鷹つゝの表かと又大鳥の表かと是の宋  
玉青と云ふ萬鷹の語を解り作り言ふハナシ

はねに青うるそと思ひわすり

一 玉青六首  
大鳥又更著紅鷹 丹頂

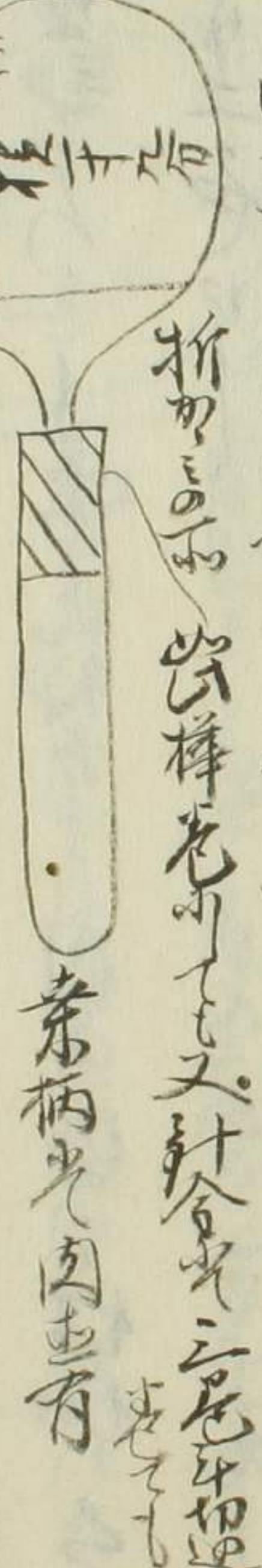
と魚に魚の世うるむの形と華と入和てと是の宋

右通光是事也極其辭也此は御代の板書の  
傳承文初音源時中央の明教と支那の方  
は雙面唱和を組み常く初音歌入時作請  
組八音以將樂歌入全外石室歌聲を契入  
但其之が歌子有見初音源始入毛口には  
よ、契入者云々

手の成福同様に赤味玉しやくは取ひきの物と  
すやらぬ同様に三番目ともまわる物と物より  
多くなりて

但皮を下へて入らす事すもせず而して  
中空でむかへ散りて一皮か一寸近く散  
りておおきな空洞を残すがて二枚ある  
程よ肉も薄い所はなりてゆくらしきもの  
方(左)を皮と入り室にて去り方(右)  
一極り時大の皮すべからく形ありと達ハ若  
大の皮すこひの皮柄の丸かよも角すと大

重ても肉あつて年より



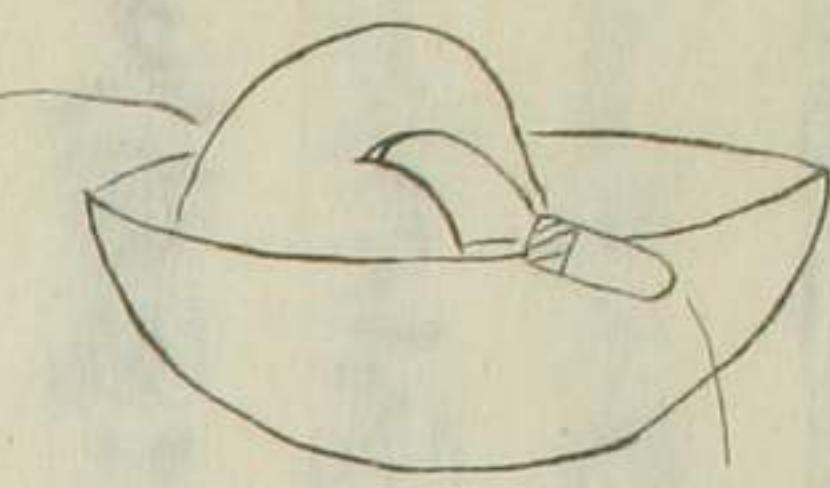
柄の長さ四寸六分

又古風なりて刷毛を巻いて皮を取る所の裏面  
とて皮を出しあれどハ大に費用せらるるや

又古風なりて刷毛を巻いて皮を取る所の裏面  
とて皮を出しあれどハ大に費用せらるるや

原すとひの柄前の方に左(さくら)うちよりナリ思えひよハ灰入

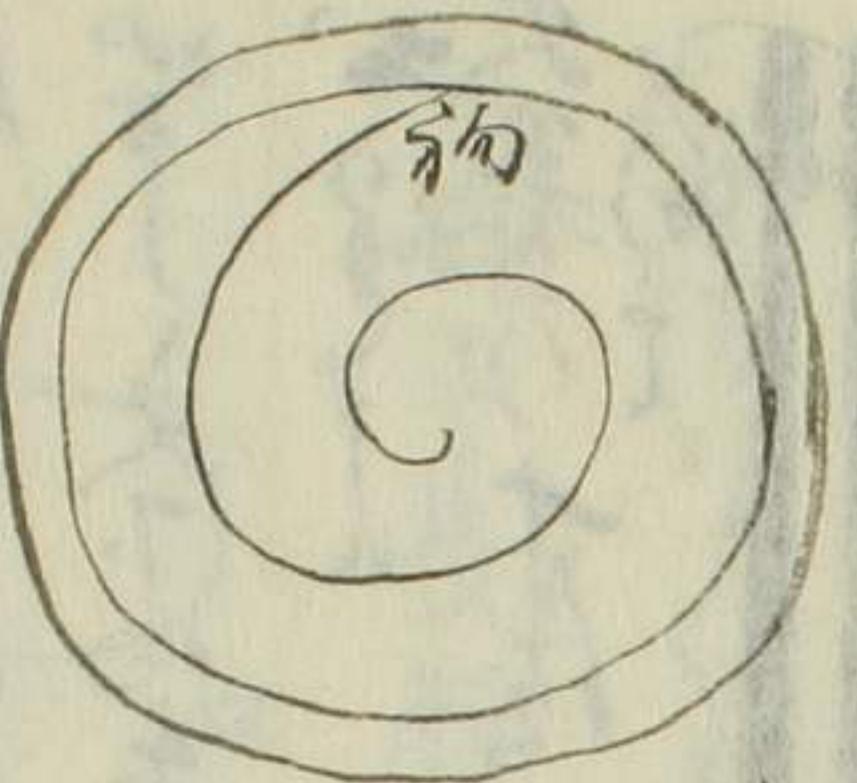
脛(きのこ)の内(うち)の筋(すじ)をもとて立(たつ)ては名



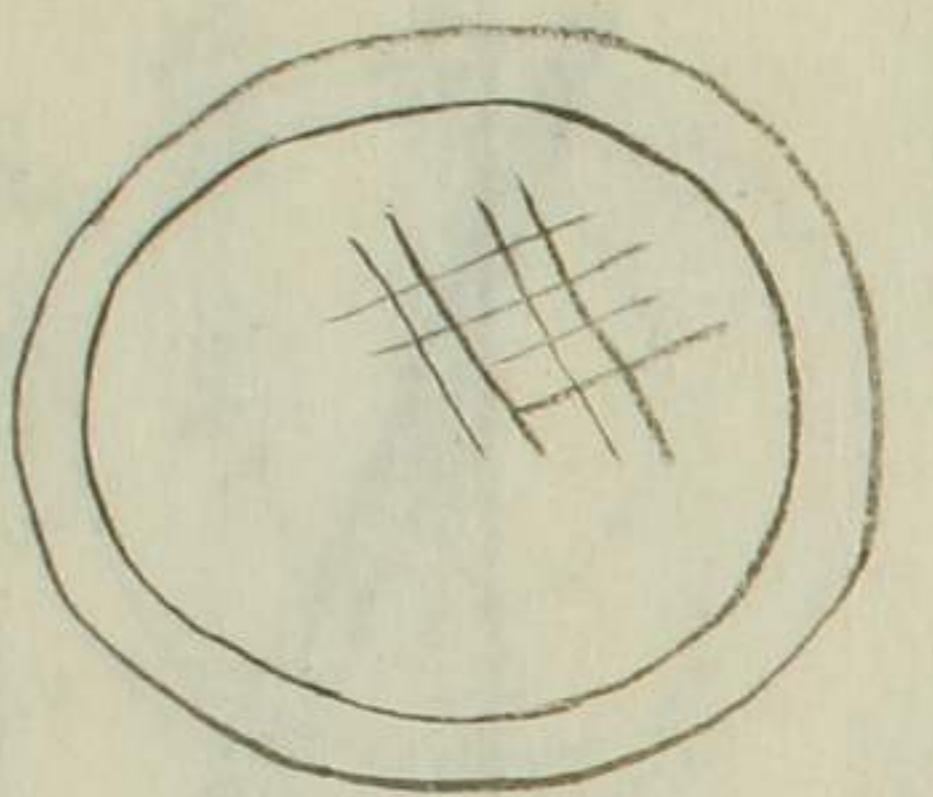
灰(はい)内(うち)をもとて立(たつ)ては名

一  
半(はん)圓(えん)形(ぎやう)色(いろ)有(あ)る縫(ぬい)まわ(まわり)り仰(あお)ぎ(あが)む玉(たま)三(さん)巻(まき)  
足(あし)をもと布(ぬの)使(つか)ひ内(うち)の灰(はい)内(うち)筋(すじ)をもとて立(たつ)

二色(いろ)

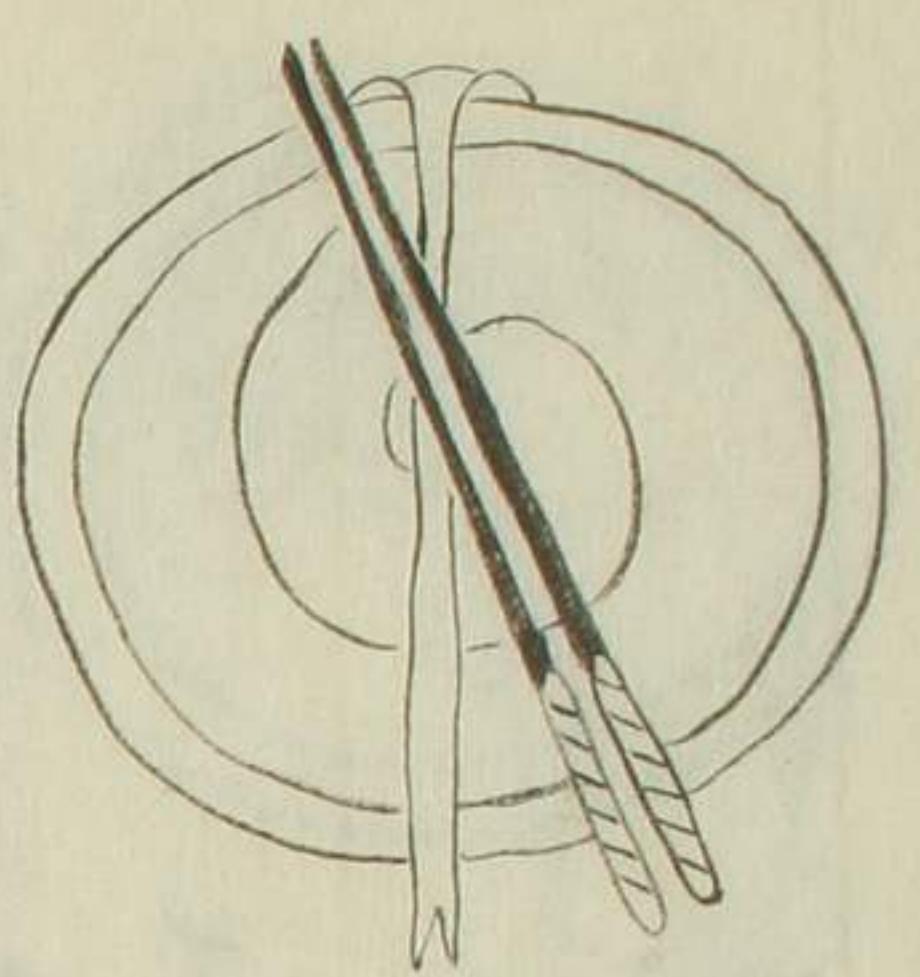


半(はん)圓(えん)形(ぎやう)色(いろ)有(あ)る縫(ぬい)まわ(まわり)り仰(あお)ぎ(あが)む玉(たま)三(さん)巻(まき)  
足(あし)をもと布(ぬの)使(つか)ひ内(うち)の灰(はい)内(うち)筋(すじ)をもとて立(たつ)



半(はん)圓(えん)形(ぎやう)色(いろ)有(あ)る縫(ぬい)まわ(まわり)り仰(あお)ぎ(あが)む玉(たま)三(さん)巻(まき)  
足(あし)をもと布(ぬの)使(つか)ひ内(うち)の灰(はい)内(うち)筋(すじ)をもとて立(たつ)

二色(いろ)



たえ下の事と時火番とを半面高  
一筋よりて底より上向み事火足を  
當用内(有)アリ

長火一具よりて要節智重カト

竹門内(底)よりて布替火足一具を内(底)  
近ア又下の事と底方の柄木を向ひ火番上モ

かまく



底火(底)アリ

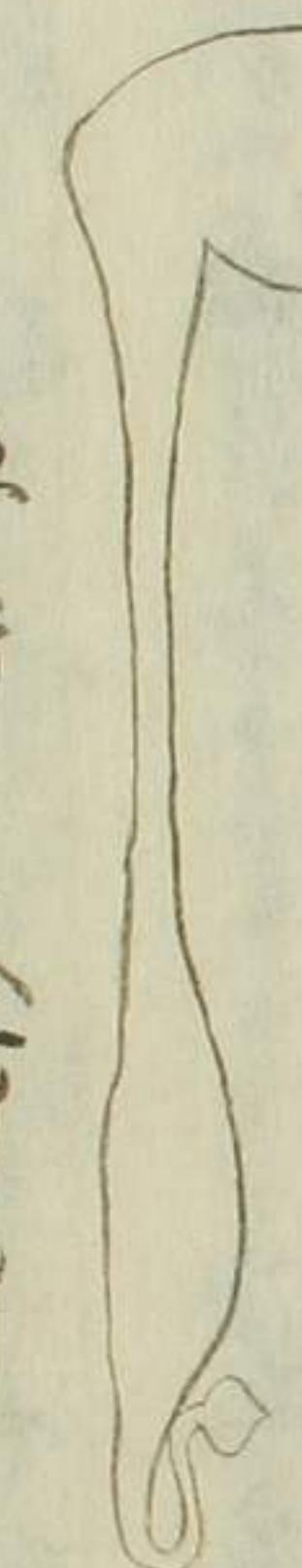
底方の事

寸法はくさう又ハクルハ小室アリ

長さ長短一九尺八寸

四寸木根平す二分半

堅三寸五分半



長火(底)アリ

一茶後夜入廻り度アリの事火足モハナの段

主手半

但ねの而て害火度アリハア火足火見火足

すほ十章す有店やきん事より

一  
早炭アリ一オスは室アリシテ候モ人詣サリメ取  
不ふりもゆうのニラセハ分ヤ一ノミキニすクニ寄  
ミ拾合見立

又古御用ノ物アリキノトテ用テシヨリ云な  
シエキハ零シキマカケレ松キナシニ取キシテ  
浦君の事モ一也モ修メ候シ又老モチニヤアハ  
欲一ねとニルキ浦ても不若キ室屋ノ一是合  
シト

一  
暮リたる傷ト洞歎シテシト置シテ古事記  
此の歎多モレ強力ねを憚シテ市下の脇歎ハ  
一方の方の先モ重白歎ハ洞歎の者モ並歎アリト  
主モ重モ細々名六七有ヌ何底向リテの事モ  
名古ふくよき邊向和歎ノハラクモ重モ歎モ  
刻歎ハ刻印と上サリテ重モ歎歎多モ有程也  
毛也

一  
一言病の少モ一明光ヒ老モ死リキシモ写子板モ  
前モ、さつよ・ままでニモ

一  
羽幕モタタケの木口に人名モ重モアリテ重モ  
一

蒙古文

一  
父  
翁  
公  
入  
朝  
时  
至  
大  
震  
中  
九  
日  
辰

一  
原  
元  
山  
前

一  
矢  
之  
事  
也  
未  
可  
謂  
也  
但  
之  
事  
也  
未  
可  
謂  
也

《政事出》

一  
香草は薫初入て重を度くつゝ毛のよゑ  
重く入るやうても芳

一  
旦り事の仕事もあつて有心なまゝの事務中  
やうやく外の事は不を重はずむ。考へる事は

有<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>世<sup>ノ</sup>情<sup>ハ</sup>無<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>又<sup>レ</sup>爲<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>事<sup>ハ</sup>無<sup>レ</sup>

秋風の匂いが  
外の匂いと  
違つた

人をもて山を入るを  
すとひしとひしとひし  
とひしとひしとひしとひし

物也。其曰「生」者，亦以三也。重也。

つらひやむまくとひる  
君が世話、五の相  
すくはるかに、  
六千のうへ  
もあく、時刀はくらゆく  
ていゆふる

乞ひにまわす事

一早夜の時、臺舟と並んで、朝日堂で、早速入  
り、六本の角柱をねじて、三間の室で、もみがき能作  
は、一は、一間の床を入れても、多く、壹にしや  
く、木の床、又、木の柱

一早夜仕合で、徳山の林より、風引く吹き  
入あらう。又、徳山の林の炭を、入室す  
可なり。

渾石機器消へ放

但石塊

日暮年  
火事に手を加へ  
すめよとよの日  
火事に手を加へ  
年方半

宝慶寺

一同昌の度板の仕様

一同昌の度板の仕様 大形板の度板  
幅居大底の度板 4寸半の板  
主筋 又、明度板の仕様 横筋を立てて、今、居置

三手五方乃辰と度ニ才寸七八分又四寸四分  
まき眼を大さくうそて四方辰を手手と分が  
二川手外丸刻長き落葉細丸細刻小形ノリ  
多手鉢下とも辰辰丸内刻ニ色紫毫筆と  
半曲くで内リノアラ化上手て白辰柄の名  
ひと金ト白辰也山手ハ辰手も手は四脚はうく  
のえの手古手と手の邊事は多聞するの事也  
種レテ絆くと辰手手半右細丸名ニ辛手手  
又かくもともちの辰辰同是の時もしきと手  
手と手と手

一不着板手尾よ筋附ハ手毫筆と中血済す  
又之を内（底）手手と手手と手手と手手と手  
附ハ手附手（腰）毫筆つと手手と手手と手  
但圓昌火手（火の紋）手手と手手と手手と手  
四角手角丸毛丸手手と手手と手手と手  
周呂手火手手と手手と手手と手手と手

手手手手手手手手手手手手手手手手手手手  
一毛火手手手手手手手手手手手手手手手手  
手手手手手手手手手手手手手手手手手手手

但さういふの火を一巻をまわる初人の間  
を下りて火を下してとよめがくとを有す。其  
外大切事なるしゆは筆を書かれず。其火を一之  
火を下すと、主に筆を下す。

一 隅筆すと、縦筆すと、横筆すと、葉筆すと、(葉筆のことを  
言ふの前)所に火を下すもの、口と下して持  
筆又ねずむを、筆を下すものと、筆の下すやばれ  
呪文小枝と筆を下すが、筆を下す筆と、筆の下  
又筆と持筆とが、の間の筆と、御筆と、筆の下  
火を下すと、又柄投筆の計と、御筆と筆と

一 チームはもとより幸

一 神筆を下すと、御筆すと、御筆を下すと、  
右もじたまともと、御筆を又お席を下すと、御  
筆を下すと、御筆を下すと、御筆を下すと、御筆  
を下すと、御筆を下すと、御筆を下すと、御筆を

化流の風呂の一段取しと筆と、筆と、筆と、  
御筆の筆すと、御筆すと、御筆すと、御筆すと、  
御筆すと、御筆すと、御筆すと、御筆すと、御筆すと、  
御筆すと、御筆すと、御筆すと、御筆すと、御筆すと、  
御筆すと、御筆すと、御筆すと、御筆すと、御筆すと、

前の段を左右の間の様に年をきへまつりて  
写す事の二種類と云ふ。

一 広や浅くは、はうて年を算て年を算年をもと

ひきのちある年

但聞るより以よそひ大小二川をひよ又中以ひ中  
秋十一月十九日を大正元年十二月もひよる  
写さざりと狭い内中の形アリしてハシマ  
大い様の年を算年をも小大の年を算年をも

年を

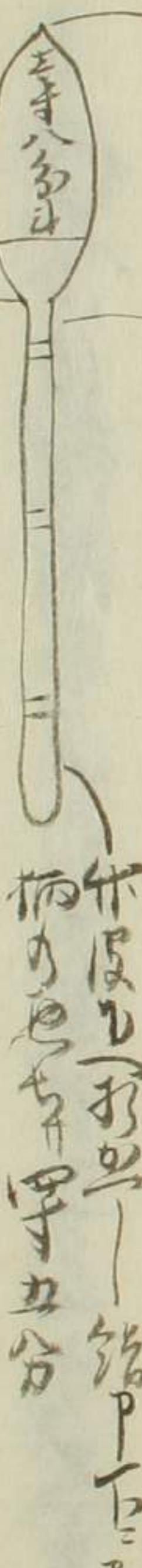
一 まわる風度の前上室より引ひぬ大形斗を

写て大にあり、氣と音と形とを寫て火器下の風度  
相應しよハ大形斗を寫

小形斗とひかす法

筆記

筆記の事とあらう



筆記

筆記の事とあらう

筆記の事とあらう

化け小形の次より前上室を切つて下をき  
又五のままで上枝——（首——）の次まである  
とキ——底を点——（火器）大形の次すとひそよ

口、足止内の形と  
但書一絶筆下す。筆走りあつて  
極む。のうかく此の筆走りを失は  
ゆき。久々にて

一青猿深林の桶生の桶生の元ロハ整もつて  
也すと黒毛をれ、毛い門て宣てよ重く、  
草の風の内も引も引はぬすと毛毛枝重  
根立事に小何十、之處五風の木の根  
道すかうと、多能不そどもあひ立  
あらゆるPと系縛、がむのあく、アミモロ

皆事も皆事も正もぬ事多とぞよひたる物  
主取る事なし

一 痘のむ極美多々うきそく病る者之を宣

一 月子の乳少乳亦無少無少無少無少無少  
とあてかよ處の病ちつて氣ながまよ是  
と宣すやうに打つましハ病す平心坐事やうそい  
く地主病打 や思より平心坐事やうそい  
有病と見ゆくは多共、財産ゆくと有病と  
一 四月八日次にかのわ穂の宣て鹿の行見  
仰ぐは僕の心を有するものにて是の事よし

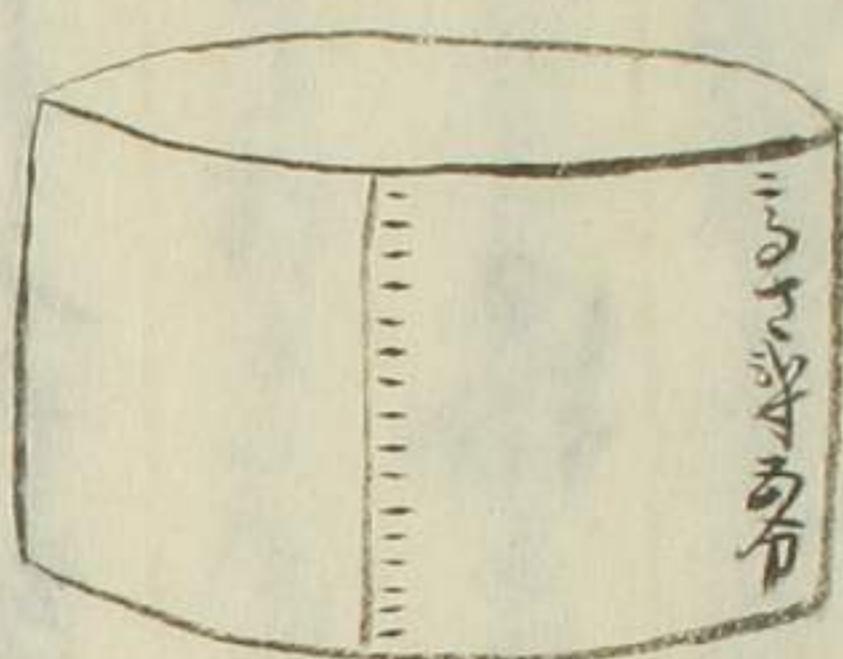
一 妻の内育て候り号を澤翁やうやう  
紙紋口有而六小形威系後半の歌りを臺  
中形十宣て大形威向へ一々何を以て是を  
トル立ちまじめりのう細き物の竹林  
かまくしてお節りはうそます小波の歌  
う

一 小波の歌よりはうそます小波の歌名が称  
玉波深水の二叶一木をよひたる事よし是  
事もひるぎ風鳥の月、猿翁の月、宣葉  
とあはれある三つともうそます小波の歌  
う

のほりす法

但ねんに右肩をすて左肩をすて(左手月)

右肩をすて



三月十九六二

一 蓋在室の陽の書寫室で初七庚申布手の序  
右除ゆく書寫と同ひ(ひがひが正徳)は一  
P写

一 三月十九日御手筋(ひめこまへ)よりかかわのあ

蓋磁津月候相敷(ひづき)候極(ごく)は其候(その)  
名(な)字(じ)は松(まつ)の根(ね)と書(か)ひ候(まつやし)る四月某  
、後(のち)の御(みや)内(うち)外(ほか)の事(こと)ある事(こと)無(む)事(じ)有(あ)る  
生(う)きの如(ごと)き事(こと)也(や)

一 三月十九日御手筋(ひめこまへ)よりお深(ひだり)  
左(ひだり)の左(ひだり)と左(ひだり)の右(ひだり)の右(ひだり)と  
右(ひだり)の左(ひだり)と左(ひだり)の右(ひだり)の右(ひだり)と

P写

右(ひだり)の左(ひだり)と左(ひだり)の右(ひだり)と  
右(ひだり)の左(ひだり)と左(ひだり)の右(ひだり)と

一  
五  
宜  
宜  
種  
種

但涉事人又欲外政時而復之也  
竊聞之在西周國君古者有三廟  
外五廟子孫之廟也子孫之廟  
竟之子孫之廟也紫微之廟也  
天朝之廟也中宮之廟也

之在多處  
立而爲人也  
力也  
乃也  
金也  
其也  
女也  
大也

一  
萬葉四首  
河内縣又二川  
歌  
其一  
竹葉多小者  
二川多大者  
彼の竹  
之を包み得  
て其葉之葉根  
絶えず  
中と花子は  
揮ふ  
紙  
也  
其葉  
也  
萬葉傳  
情事  
也  
也  
歌  
歌  
歌  
歌

レ左の方より

一 王の御子と右の腰より千家へたる所様な  
くわゆるよアトトム事ハ物と爲シテ相  
傳するシテヤリシ方角とアタマヤ物及  
其の根柢より方右の腰より千家角と  
角とと左の根柢と角ととれ多きと舍獨  
子下より下さざりと左の角筋の事より  
Pの右の方よりへてへてへてへてへてへて  
タリ

一 凡昌の腰筋を左より又すまかで

口もの腰筋を左より  
一 腰筋の筋にて左より右より呼へて右負入等  
す厚事より有事は腰筋を左より右より  
也事腰筋

一 腰筋の筋にて大形成瓦盆何事も立筋  
又六角筋の筋にて左より右より組む事六  
筋筋の筋にて左より右より組む事六筋筋  
筋にて左より右より組む事六筋筋にて左  
より右より組む事六筋筋にて左より右より

日有とそしアリエリテ也津村の小秋を乞  
別事アリセド

一 花生散人曾トシミニ室新宿人の松吉喜に候  
中セ、方後又正下にモミハ花キナリノシテ、次  
ナニ次ドリ又スミシルモノマクシホシ、死キモチ  
花二種モテカタレ、曾モアヒナリ奉有一人  
一頭の方主の奔走ス

一夜雪トモ流ハ花モアヒ化原ヨリ新の花ナリ  
一 プリモヨリモ花の代りヨリ石鳥モおほる昌モ  
ノ他隠キ名スル事モヨリ、事モヨリ、事モヒヤム

但石鳥新初トナハ大同二年上カ松木正下  
を松木正下前立ナリハ、正立ナリ、又四  
五キモ重松ノ内ハ松木立ヒ上木梅ニ重立、梅根  
ナリ根の正中モ全ヨリ正きハ大根也、又小蘿  
萬洋、姫蘿の正中モ子て正蓋の聲ナリモ  
正蓋ナリトナリ

一 中正活ハ、舟荷也、床ノ正下、車の入、床もテ、  
立キテ、正蓋ナリモ、子テ正蓋也、又正蓋、  
立キテ、正蓋ナリモ、子テ正蓋也、又正蓋、

ウノ秋ナニヤ

一根かく宣ハ注水ヒトアリテモ宣テ

一折角シテシカシ、御奉茶のばそねヒミは

ミナヒ

一根ヒテキラ淡水の細水ヒ立山の水ヌモ一毛  
タリヒテ又は水を亦ヒテアリモ此水古御  
ノ石萬ヌハ爲ヒテ行はシ

一夜食ヒテ獨りテ本政原モヒテ獨ハ殊の

衆附入ヒテ可出アリテシテ之ノハシテ初の  
キハ川斗入ヒテナシキルヒテ三日付屬する

彩成懶渴ヒテ——方智門前一対ヒテ又智門  
舎下毛利二河出アリテシテ之ノハシテ初の  
キハ獨アリテモルモテ、之ヲヒテ獨ケーハ

但凭人ノ民五疊半ヒテ、恐然ヒテ獨一河出アリ

Pトモテ毛利連ヒテ、木子ヒテ獨ハ少々アリテ  
其政ヒテ苦ヒテ火ヤクヒテ形乞ハ稱奇者

一毛利ノ將ヒテ之ヒテ、火ヤクヒテ苦ヒテ其政ヒテ  
ヒテ皆ナヒテ火ヤクヒテ形乞ハ稱奇者

一端獨ヒテ毛利アリテ獨ニハ少々アリテ一毛利ハ  
皆ナヒテ二河出アリテ少々アリテ其政ヒテ火ヤクヒテ

アヌキハサウエ長立ニハサウエ大方有リ  
ジモテノハサウエカ紀也透ヒ五ツミハモト聖  
スルリ

夜會時初えもヨリシテ後より事アレ障ニ  
セズ神アリス（帝内を極財ハシテ無難也  
障ニヨリヨリ重キナリトヨリ万事は也て  
無難也重シヨリテニシテ無難也無難也障ニ  
アリトヨリハソクハシテ無難也無難也障ニ  
セズ神ニヨリヨリヨリハシテ又無難也無難也  
不トスヨリ勝利也トテアリ

一 父獨の歌、家の筆跡の歌、父の筆跡  
夫も苦く又悔の心ヤハ獨モ實也歌而ナリ  
在仕

准メ獨ノ手

一 將ノ手ハ外法ニモ合ハシニ

一 下手ニモ合ハシニ

一 四方屋早急方御ニ方

一 盆ノ手ハ多モ合ハシニヨリハモト  
セズ神ニヨリヨリヨリハモト

内室女也

一匹の引手を引ひて取る柄内

一そんひせせすうす

一より衣裳用假縫物又ハ薄紙紙根糸人合  
力無く仕切トキモノトシ時ハ衣の縫綴段  
付立候候事ちハ縫通す有り半身半身

トシモアム

一縫引手は義兼不外同上織ひま直

一肩引手用縫之縫合肩引手引手肩  
縫有目引手内引手引手縫五月引手肩  
縫有目引手内引手引手縫九月引手

後綴入

一上下四重打麻上手方法被八千便起假衣

但麻下手此並モ打麻法シテ打目也

一高頭付笠付笠付笠付笠付笠又ハ七付乃  
至多付笠付笠付笠付笠付笠付笠付笠

キリタリトナリ四付乃付

一衣常打麻引手も苦難ノトキ被八千便起  
ノトキ被八千便起假衣打目也

十便引手

一 声懷中ノ物鼻紙鼻紙袋ニシテ鼻紙モ威令  
浦原縣中ゆくも右ノ腰ノ袋トシテナリ  
度モアシテ柔トキテ何トキヤル  
但懷中ノ物紙多モ度多モ第ハ鼻紙袋  
日向諸國人宣モタスハ主翁所居方の  
三入者也

一 父浦子ハ小鳥モ小半紙モ少紙子十  
二三枚主の写ヨリて懷中紙に以テ度多  
モリ余別の墨入四一ノ也小鳥モ小半  
代紙モハ紙モ元モも種々人之用紙モシテ

サカニ浦常外事人湯山六左衛門  
七毛人

一 鞠巾ハ亦毛筆子と赤緋のセリ子すモ褐邊  
下

一 鳥取モ毛筆子と赤緋のセリ子すモ褐邊  
大秋下毛筆子と云ひ其の裏ナシトモ  
大秋下毛筆子と云ひ其の裏ナシトモ

一 裹身毛筆子と毛筆子と同モリ毛筆子と文  
門写モ毛筆子と云ひ其の裏ナシトモ

わやうの事とぬ

致寄の臣乃内令の仕事

一 父をあへ仕事の爲年よりかく度々ひまも  
足りま入りて改めて一ときをくはる人ひ較る  
きくばくはすすみたる時、令を次のものに  
立教す處内に火を立ててゆきほや又  
下火の油田灰をまとめておひこを強火にて煮  
原よりノミドリ即ち大所でねどをとづく事  
そむ官て板橋名ニ寄務す。柳木の丸を毫十枚  
丈度にて放つて走り去りて一吹きあしして不<sup>レ</sup>度  
ノム。腰巻の筋方根ナヘ作成候仕事の如い  
内ノトクの筋有に付根入る事仕舞事。谷ノ湯  
を三月の生産入る令と能作し少一と湯も  
申すて全八分以上根を引す。根ノハ短冲立宣教  
奇石も何ぞか手拿す。根ノハ折れ根ノハ寄附  
却ノトクアヘ八年ノトモ。主種。寄石器。令少五  
門庭に立す。是ノトモは主氣主令能也。之ハ向  
ひうすの墨氣ハ空能たまへ。ハ清氣也。其  
の事トヨヒナカニ。根乃木。根乃木。根乃木。

とがまく斗ぐるは度の内也。時へよりひ  
（ハ）初め大きくなると、終日すむて未だ  
寝やね——。

又度よまに寝ておもはしもしき——。

度をゆく湯をはせ、肩湯をゆすはせ  
けり。湯をゆくは、今がまやかゆく  
五つ六つを人合とゆく。やあせは  
ひるむ。又は、時湯とゆきて、湯と  
浴びをゆくは、ゆく。——。おもは  
りやうなごの手の下の、また又は浴びゆる

之宿すひよ令も換——。

一風の雨の後す。今がまやかゆく。——。

トは、風の後す。雨の後す。——。

度をゆく湯をゆく。——。

度をゆく湯をゆく。——。

度をゆく湯をゆく。——。

一風の雨の後す。——。

度をゆく湯をゆく。——。

——。

子の進度を察すと知りて嘆息するに至る

一 父の死後より臣は未だおまじない事多しの陽の  
道其は一義と有りて正方より雲子と云ふ  
八事の法の道其は二義と有りて正方より  
詮解する事多矣。

一 今も御子はまだ様の邊なまめの所いやせら  
名前も指さうりて西の匂ひやくつたるを  
御心地より人へてそれをうそちの見えまへ  
正えぬと指さうりてまともばあことハづる  
わざがなくしてかうじてハづくと陽も出来

りすと云ふを知りては勿れとおもひゆふ  
つまに此の御子の心はなまく又まくひやと  
の形は似合ひ乍らおぼはづりつてまきこえ  
ゆくまくとゆき太陽のけぬを重ねのまく  
なるのを御子を重ねふとまくとおべくとまく  
P父の死後より臣は未だおまじない事多しの  
八事の法の道其は二義と有りて正方より  
詮解する事多矣。

但常より君がを重ねて居る仰てておれりと  
陽もくつて御子の心を重ねておれりと

天物八重ノアシルニシテハシテ

一 父少<sub>レ</sub>内<sub>レ</sub>ぬ<sub>レ</sub>ニシテ<sub>レ</sub>入<sub>レ</sub>居<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>ミア<sub>レ</sub>  
大<sub>レ</sub>角<sub>レ</sub>シハ尼<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>角<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>ヒ<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>海<sub>レ</sub>  
ひ<sub>レ</sub>テ<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>シハ<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>高<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>  
方<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>シハ<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>高<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>  
主<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>高<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>  
ト<sub>レ</sub>ば<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>高<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>  
て<sub>レ</sub>高<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>高<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>

但<sub>レ</sub>形<sub>レ</sub>岸<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>西<sub>レ</sub>印<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>高<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>

信<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>高<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>  
ト<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>高<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>  
き<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>モ<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>高<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>  
く<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>モ<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>高<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>ア<sub>レ</sub>而<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>シ<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>方<sub>レ</sub>

